

そもそもかの御在生のむかし、おなじこころざしにして、あゆみを遼遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして心を当来の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまわりしかども、そのひとびとにともないて念仏もうさるる老若、そのかずをしらずおわしますなかに、上人のおおせにあらざる異義どもを、近来はおおくおおせられおうてそうろうよし、つたえうけたまわる。いわれなき条々の子細のこと。

第13組 名願寺住職

第10章 歎異するものと (中序) 歎異されるもの

名畑 格

text by Itaru Nabata

はじめに

唯円は歎異抄前序において、「先師口伝の真信に異なることを嘆き」と異義を批判する根拠を〈先師・口伝〉の「真信」におかれる。ふつう異義は「正義^{しやうぎ}」に対して「異義」である。なぜ「真信」なのか。

それを確認する意味で第十章には「念仏には無義をもって義とす」というおおせを掲げられ、中序と呼ばれる後半が引き起こされる。成上起下（承上起下）の起下は第十章の師訓の言葉も含んでの起下ではないだろうか。つまり中序を含む第十章は、師訓編にも属し、異義篇にも属するような構造を持っているといえる。

「正義」について蓮如上人は注意深く、「たとい正義^{しやうぎ}たりとも、しげからんことをば、停止^{ちやうじ}すべき由候う」（『御一代記聞書 134』聖典 879 頁）と言う。「しげからん」とは「稠^{しげ}し」という意味で、「生死の稠林」という言葉もあるように、「はげしい」ことであり、正義を振りかざしながら、逆に正義を時代から失わせていることの歎異が、「停止」という蓮如の批判である。

「ひとのくちをふさぎ、相論をたたかいかたんがために、まったくおおせにてなきことをも、おおせとのみもうすこと」（『歎異抄後序』聖典 641 頁）とあるように、名利心に「おおせ」を乗せ、「たたかいかたん」ために「おおせ」

を利用する。だからこそ「真信」が歎異の根拠になるのだろう。

異義を失った時代

「真宗は立場にならない」とある先生から教わった。それは依止（よりどころ）の問題を言っておられるのではなく、真宗を我が物とし、人をさばく道具にしてまっていることの意味で立場にならないと言われるのであろう。

ある研修会の本部ミーティングで、「いま信行両座の問答が開かれたら、私たちは疑いなく信の座に座ってしまうだろうね」と話題になった。それと同じように異義篇を読んでも、決して異義には自分の身をおかない。したり顔で異義を批判する立場に身をおく。問題を感じることもなく。そこには歎異されるものはどこにもいない。現代は異義を失った時代ではないか。どうしてこうなってしまったのか。その話題になった研修会の後、何気なしに曾我先生の本を読んでいたら、見事にご自身を行の座においてその物語を読んでおられる姿に出会った。「私は自力の迷心に拘かかりはて金剛の真信に昏かかりし、数百人の門徒の末座に自己を発見したのであります。」（『曾我量深選集第二巻「信行両座」）。

「鬱うつけ悔のいろをふくめり」という御伝鈔の言葉を自分の言葉としてはいておられた。「上人のおおせ」を立場として、身を寄せ、いい気になりながら「おおせ」を失っている自分が見えてきた。まさに異義を失った時代なのだろう。

「教え」としての異義篇

曾我先生は『歎異抄聴記』の中で「異義が盛んであることは然し浄土真宗の盛んな反証である。異義が盛んになるとご正意が廃れることもあるが、異義が盛んであることはご正意が起ることを逆に証明している。」と言われる。つまり転ぜられるものとしての異義が、歎異されるものとしての異義が逆に、「ご正意の起」こりを証明し、また「真信」への開けを待たれているのであろう。ある先生は、「経験を通してでない^と教えに触れることはできない。しかし経験をとおすことが教えを歪める。いや歪めるのではない。歪めたことが教えられないのです。自己の範囲の中に教えを植え付け「植諸徳本」、自分はいつも教えに従っているという「係念我国」、隠れた自負心が教えられないのです。」と言われる。「隠れた自負心が教えられない」という「教え」に向き合いたいと思う。